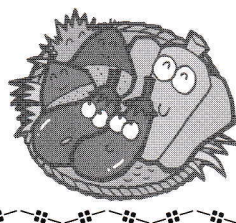


野菜作り

Q&A



収量・品質の向上

大リーガーの松井秀喜選手は野球に対する素質があり、かつ、家庭や学校などの環境が良かった上に、すぐれて努力家でもあります。このように、ヒトの場合、生涯を通して「自己実現」するには、素質・環境・教育のバランスある向上が求められます。

一方、作物はヒトと違って脳がないため教育はかなわず、遺伝的な資質改善と、その資質を充分に発揮させるための作物の環境改善が物質生産性（収量・品質）向上の二大要因になります。

作物は数千年前から、名もなきノーベル賞学者によって改良されてきました。例えば、三〇kgの桜島大根や一・五kgの守口大根はアイコンという植物の根身を

前者は肥大化、後者は伸長化させてきたのです。

これらの地方品種はそれぞれの育成された地域にしか実在しない品種なのです。言い換えれば、それぞれの環境に適用するように一体的に遺伝資質が改良され、現在も選抜・固定に努めダイナミックに生かされています。

近年、バイオテクノロジーの長足の進歩で、世界から遺伝資源を探索し、地方品種より遺伝資質で絶対的に優位な雑種第一代F₁が育成されています。F₁品種は栽培者に作物環境の改善を強要することで、広域的に存在しているのです。

この全国品種ないしは世界的品種のF₁は種苗メーカー

によるもので、地方品種のような遺伝資質と作物環境の一体的な改善でない。栽培者はもっぱらF₁品種の資質が発揮できる環境改善に努めることによって収量・品質の向上を図ることとなります。

従って、作物環境の一つである生物的環境対策（ウイルス病、土壌病原菌、線虫・害虫、雑草、根粒菌等の共生）、そしてトンネル、ハウス等の気象的環境対策や作物の根にとって居心地の良い土づくり対策が肝要なのです。

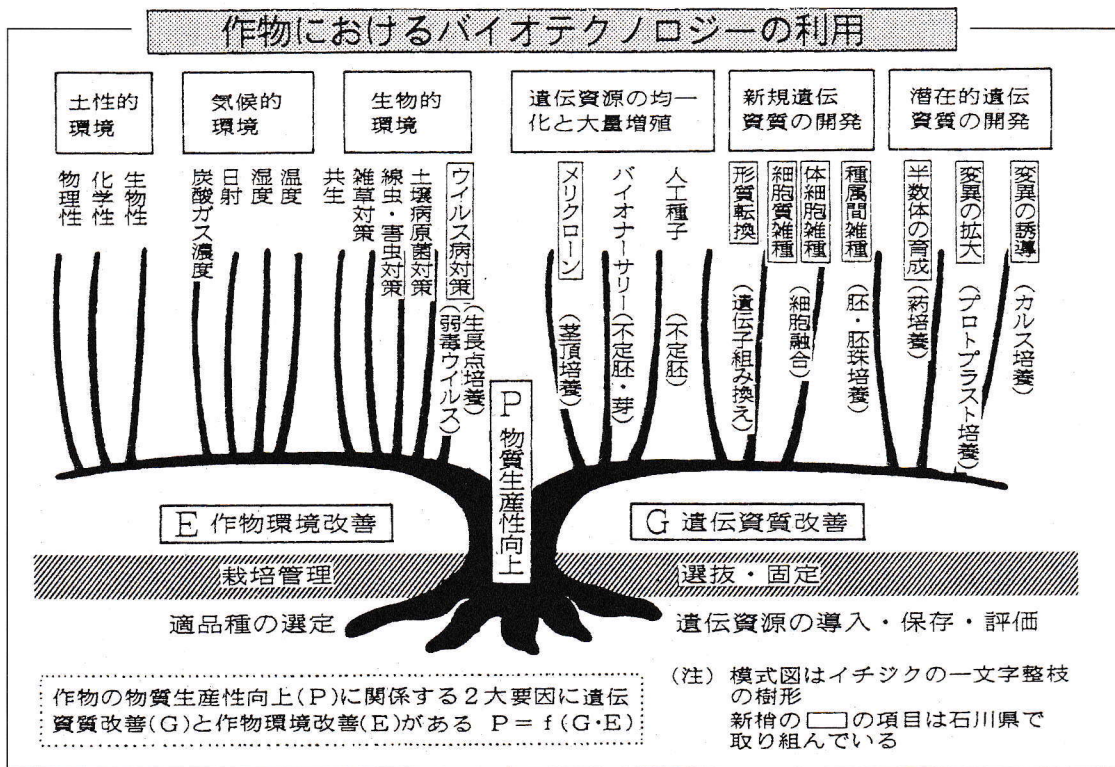
野生種から改良されてきた作物は、野生種からみると一種の奇形で、決して自然状態ではその素質を発揮できません。人間の助力なしでは実在しない経済作物なのです。

作物が求める適

正な栽培管理をしてやれば必ず応えてくれます。それが作物と会話すると言うことでしよう。

J A石川かほく J Aグリーン
営農指導担当 山辺 守

作物におけるバイオテクノロジーの利用



(注) 模式図はイチジクの一字整枝の樹形
新梢の□の項目は石川県で取り組んでいる